

主筆 江原萬里

聖書の眞理

第五十三號

三月號

内村鑑三全集の刊行（その二）

我等の立場

聖書は神の御言

江原萬里

逐語神言説と高等批評

エレミヤ記の研究

江原萬里

申命記の發見と宗教改革

復活の確實性に就て

小栗襄三

若き家庭の死別

鈴木敏元

柏木通信

齋藤宗次郎

祖父の書翰

江原萬里

編輯餘録

内村鑑三全集の刊行（その二）

私の一友人は先生を評して、先生は舊い信仰の人であつて且つ新しい人であつた。凡そ現代の思想と生活の如何なる方面に於ても、重要な問題には必らず觸れ、之に對して獨自の見解を發表し、獨自の行動を採られた。かくまで獨創的にして深い人を見ない。我等は先生に師事して如何ばかり啓發されたかわからないと云つた。私も亦之に同感した。

私は最近先生の思想を取纏めて考へて見度く、四十年來書き遣された各方面に對する意見が復讀して、思はず感嘆の聲を發した事は、それが今尙新鮮であつて、少しも陳腐になつて居ない事である。その觀察の鋭敏、洞察の透徹、その批判の深刻、その指示の遠大、時弊に適中し、暗示に富み、悲痛に憫む者には光明を與へ、意氣阻喪した者を奮起せしめ、之を獨立自主の人たらしめる力に満ちて居る。恐らくは我が國現代の思想と生活のうちに、先生程明白に基督教の眞理を生かし、聖書を以て我が國の礎、各家庭の基、各個人の生命たらしむべき所以を納得せしめた人は他にない。

先生の文章の雄偉、簡潔、清冽は既に世に定評がある。其の専門の聖書研究上の造詣の深きは今更云ふを待たず、自然科学と世界歴史と英文學とに關する博學多識も亦驚くべきものがある。然かも此等の知識は單に知識として之を傳へたのでなくして、悉くが先生獨自の人格の熔爐のうちに投げ込まれ、渾然として獨自の生命の表現に使用せられたのである。

されば先生が先生に師事した者の上に遺された感化力は甚だ強く

あつた。此の事はカーライルに酷似する。嘗てニコルがカーライルの評傳に於て云つた。「凡そカーライルを知る者は、彼を everything とするか、然らずば nothing とする」と。先生には敵が多い。彼等は今に至るまで先生を嫌惡し、甚しきは其の動機すら疑ふ者もある之に反して先生の偉大を知る者は我が國人中甚だ少數である。然かもニコルが更にカーライルを評して、カーライルを眞に知る者は少數であつたが、彼等は皆社會に於て一塵の師となつた。故にカーライルは師の師と云ふべきであると云つたやうに、現今先生の感化を受けた者は、我が國の各方面に於て、其の社會的位置は兎もあれ、一塵の指導者となつて居る者が多い。

今内村鑑三全集の刊行創まる。此の書こそは當に、世界に對して我が國明治維新の原動力説明の最良書であり、我が國民に對しては、その將來の行路方向の指南車である。眞に日本及び日本人を理解する鍵はこゝに在る。恐らくは明治維新以來今までに、此れ位深く、博く、高く、且つ清く、大和魂と其の企求とを表現した書は他に見る事が出来ないであらう。

古人は云つた。家に黄金滿をいを遺すは、一經を遺すに若かず」と。私は基督者と基督者にあらざる者とを問はず、此の書だけは其の家に藏して、子又は孫に遺産とするに價すると信する。此の書に包藏せられた眞理が他日其の家の者を感奮興起せしめ、其の家から偉人が産出されるであらうと期待する者である。

此の全集の編輯に盡力された委員諸氏一同、殊に直接其の實務に當られた鈴木俊郎、齋藤宗次郎兩氏の熱誠は永く記憶せられるであらう。附記して感謝の意を表す。

聖書之眞理

第五十三號

昭和七年三月一日發行

我等の立場

主 筆

一、我等は何よりも先づ正義なる神に對して眞に義しくあらん事を欲する。Be just with God, and All is rightである。されば、我等は我等の家庭、我等の町村、我等の國、我等の世界が幸福である前に、之をして悉く神に對して義しくあらん事を欲し、あらしめんと期する。我等の立場は正義以上は何者をも愛しない事に在る。正義以上に國を愛しない。我が國の爲す事と云へば悉く是であり他國の爲すことゝあらば悉く非とする者を偽善者と思ふ。正義のみ國を高くするものと信する。

二、我等は協同を尊び、一致を愛する。然し乍ら、正義の上に立たずして協同せんと欲せず、一致を計らない。世皆舉つて反對するとも、我等は正義を正義として、只一人となる事を辭しない。輿論、社會思想、社會運動は我等の關知せざるところ、我等はマルチン・ルーテルの如く、只一人立つて、全世界を向ふにまはし、否と叫ぶ。世悉く戦争を是とするも、預言者ミカヤの如く只一人我等は之を非とする。(列王記上二二)。

三、されど我等は只一人あるのではない。我等は我等の一切萬事であり給ふキリストに在りて立つ。我等は弱い。されど主は強い。我等は己が罪人なるを知る。されどキリスト我等の義となり給ふ。我等は彼と偕に在り、偕に生き、偕に働く。彼が我等を用ゐて此の世に打ち克ち給ふのである。我等は一人ではない。キリストに在りて友は全世界に在り、過去、現在、未來、永遠に在る。

聖書は神の御言 (上)

逐語神言説と高等批評

江原 萬里

一

基督教は此の世の智慧でない。現在社會制度又は組織の維持或は改革の原理、さては此の世に於ける生活の安易幸福の道を教ゆるものでない。イエスはロマの總督ピラトの前にて、「我が國は此の世の國にあらず」と云ひ給ふた。基督教が其の中に「生き、動き、また在る」ところの國は「此の世の上」に在り、且つ又「此の世の向ふ」に在る國である。此の事がはつきり理解出來て、始めて基督教が解るのである。パウロは云つた。

讃むべきかな、我等の主イエス・キリストの

父なる神、かれはキリストに由りて靈のもろも

ろの祝福をもて天の處にて我等を祝し、御前に
潔く瑕なからしめん爲に、世の創の前より我等
をキリストの中に選び、御意のまゝにイエス・
キリストに由りて己が子となさんことを定め給
へり……即ち時満ちて經綸にしたがひ、天に
在るもの、地にあるものを悉くキリストに在り
て一つに歸せしめ給ふ。(ヘベソ・三・一〇)

我等の眞の幸福の所在、パウロの云へる「天の處」は明かに現在社會、現存の國家でない。靈眼を以てするにあらざれば、現在に之を發見する事の出來ない、「此の世の上」に在る神の國である。我等は此の處に於て、靈的に壯大極まりなき祝福を受けしめらるゝやう、此の世界創造の以前、既に神に選ばれたのである。而して時満つるに及び此の後、「此の世の向ふに」、それが地上に實現する即ちキリストに在りて天と地とが一つに歸せしめられ、今肉眼に見えない神の國が、其の時あらわ

に出現し、我らはその國の民として永生を受ける
と云ふのである。之がイエスが「我が國」と云ひ
給ふた國である。この位現世を超越せる世界はな
い。然かもこの位現在社會の革命思想はない。こ
れが基督教の傳ふる眞理である。

二

神と此の御國の眞理を明かに傳ふるものが聖書
である。故に基督教は聖書なくして存在しない。
若し聖書が眞理でなくして虚偽であり、人間の空
想の産物であつて、天地を創造し給へる神の經綸
を語り給へる神の御言でない事が、明白に證明さ
れた時には、基督教は全く破壊されるのである。
基督教は聖書と共に存在し、聖書と共に滅びる。
若し聖書にして神の言でなくば、基督教も亦只一
つの麗はしい夏の夜の夢と化する。

三

聖書は神御自身に就き、又人類の將來の運命に

就いて、神自ら人類に示し給ふた天啓であり、永
遠に謬らざる書物であるとは基督教を奉ずる者の
確信である。

然るに從來聖書が神の御言である事を信する者
は、嘗にその内容が悉く神の御意（こゝろ）の啓示、その行
動の記録であるばかりでなく、聖書の文字其の物
が言々句々皆神の御言であり、神が宛かも、自ら筆
を執つて書き給ふたやうに、人を感動せしめ、人
を筆として之を書き給ふたのであると信ぜられて
來た。書いた者は神であつて人ではない。人はそ
の筆に過ぎない、人筆とでも云ふべきである。故
に書かれた文字は一字と雖も、神の言語でないも
のではない。天地は過ぎゆくも、そこに記されたる
一點一劃も變らない。之は永遠の眞理を傳へて謬
らない。之れ所謂逐語神言説である。

彼等は云ふ。創世記第一章一節の「元始に神天
地を創造り給へり」より、黙示録の末節「願はく

は主イエスの恩恵、なんぢら凡ての者と偕に在らんことを」に至るまで、聖書は天地創造の唯一の神が自ら書き給ふた一卷の書である。それはモーセが語り、イザヤが傳へ、パウロ、ヨハネが書いたのではない。神が我らに語り給ふたのである。故に聖書中の言をパウロが云つたとか、ヨハネが云つたとか云ふ必要はない。悉く謬りなき神の御言、前なると後なるとを問はず悉く正しい。その一つを疑ひ、その一つに反する事は、之れ神に背く事であると主張された。

四

此の聖書の文字全部神言、内容全部無謬の信念は、基督教以前既にユダヤに存在した。嘗てユダヤにアモス、ホセア、イザヤ、エレミヤ等の預言者が輩出して盛に神の御言を述べた。然るにバビロン流配より歸還後、預言はユダヤに絶えた。それと同時に、預言者の傳へた此等の御言の編纂が

盛んとなり、その編纂された文書は全部神の御言であり謬ないとの信念が生じた。此の信念は基督教に傳はつて千數百年、歐米の所謂基督教國の人々の心を固く捉へ、彼等の信仰に不動の基礎を與へたのであつた。

されどロマカトリック教會が主張する、其の教會は絶對的に正しく、神の眞理、途、生命は教會以外にないとの教會無謬説は、聖書を基礎とするものでなく、傳説に由つたものである。故に聖書無謬説と必ずしも一致しない。こゝに於てか教會内の異端者は自説を支持するに都合よきやう、或時は教會に由り、或時は聖書に由り、教會を手こずらしたのである。

此後プロテスタント主義が興り、聖書の權威を標榜して、傳説の上に築かれたロマカトリック教會の權威を破壊して以來、聖書のみが信仰の唯一の據り所となり、標準となり、益々聖書の全部神

言無謬説が人心を支配するに至つた。

殊にルーテルは聖書を唯一の根據として堅く彼の信仰に立つた。彼の燃ゆるが如き熱情、不動の信念、それ等は悉く聖書から流れ出たのであつた。これが人心に與へた感銘は深くあつた。十七世紀の頃チリングウオースが云つたやうに、當時は「聖書、聖書のみがプロテスタントの宗教」であつた。然し乍ら、改革者は聖書を尊重し、之を神の御言としたけれども、彼らはカトリック教會が教會に盲従するやうに、聖書に盲従したのではなかつた。彼らは何故に聖書が神の御言であるかを深く理解してゐた。何となれば、彼らは聖書を通じて且つ直接に、神の御言を靈に由つて己が心に感じただからであつた。

ウエストコットはルーテルを評して云つた。

彼の聖書の註釋を読む時、彼はそれが實際歴史的文書であり乍ら、然かも尙、前代未聞の靈

的意味を有するものであると云ふ事を、明かに

認めて居る者だと感じないわけにゆかない。ルーテルにとつては、使徒たち及び預言者たちの言は「活ける言」であつた。聖靈が直接に自分に語り、又人々の心の奥底に透徹するものであつた。それは單に之を議論の前提となし、又はその證據とするだけのものではなかつた。(The

Bible in the Church 二四五頁)

それは明かに文字であつた。然かもその言は直接に己が心に響き亘る神の活ける生命の御言であつた。嘗て神が使徒たちに語り給へると同様に、その御言が千數百年後、同じ文字を以て、然かも永遠に清新なる生ける意味を以て、彼らに臨んだのであつた。

それ故に、彼らは聖書を通じて生けるキリストに接したのである。そして再び使徒時代を復活したのであつた。されば彼らには聖書の文字は死物

ではなかつた。故に之を自由に論評し得た。聖書を信奉すること何人よりも深くあつたルーテルは聖書中ヤコブ書を藁の書翰と云ひて之を貶した。彼がラテン語より翻譯した聖書は、獨乙國の國民の書として讀まれた程一般に普及したものであるが、その中に彼はへブル書、ヤコブ書、ユダ書及び黙示録を本文に入れず、批評の序文を附して之を附録として収録した。大膽、否亂暴と云へば當時これ程の亂暴はなかつたのであろう。

ルーテルの如き、カルビンの如き、其他眞に生けるキリストの御救に接し、之に確固不動の活ける信仰を持つる改革者の主なる者は、皆聖書が神の御言であり、且つ己が生命の泉である事を實感した者であつた。それ故かゝる自由なる批評をなし得たのである。然るに一般民衆はそうでない。彼等は人に云はるゝまゝに聖書を盲信し、文字の崇拜者となつた。遂に嚴格なる聖書無謬説、即ち

その言々句々が悉く神の御言にして、人は皆之に規律されなければならぬと思ふに至つたのである。中世時代よりのカトリック教會も、近世のプロテスタント教會も、それを無智の民に教へたのである。

五

中世時代聖書は唯一の信賴すべき自然科学の教科書であり、歴史の典據であり、確實なる人間の未來記であつた。當時教會が一般の人民に教えた宇宙觀、人生觀は此の聖書の文字を拾集し、之に事實虛妄、然かも教會の權威を以て正しとされた種々の傳説を加へて、つち上げたものであつて、人心を刺激するに足る華々しい色彩を交へ、無智なる民に恐怖と希望とを與へるに充分であつた。

宇宙は天上地上及び地下の三層から成つてゐる。天は地を覆ひ、無數の星を以て之を鑲ばめてある。その天の更に上の方に聖なる三位の神の御座があ

り無數の天使に圍繞される。此の天使達は神と下界との間を往來しその使者となる。地は不動平坦の圓盤であつて、其の圓の中心にエルサレムの聖山が屹立してゐる、こゝは人類の始祖アダムの葬られたところ、而して此のアダムの髑髏さかんとうべの上に、即ちゴルゴダ山上に、神の子キリストの十字架が立ち、そこから神の子の生命の寶血は地上に流された。人は此の生命に由つて天國に上り得る。

地下は暗い地獄である、惡魔とその輩下が住むところ、彼らは天使と人間の靈魂の奪合をなし、天使から掠奪した罪人をこゝに連れ來て、永遠の呪詛と苦痛のうちに之を投げ入れるのである。

かゝる世界は聖なる三位の神が天に於ける思考の結果成つたものである。やがて神の經綸に由り地上で大なる審判が開始される。そして罪人は盡きざる永遠の火の中に而して聖徒は天に携へ上げられ、此の地の終末が來る。これが聖書無謬説か

ら出た自然科學であり、人類の歴史であり、その未來記であり、人間道德の根源であつた。

彼らには聖書の文字は一字一句悉く神の命であり、その御意ごいであると信じた。之に本末、前後、輕重の差があろう筈はない。されば清教徒の間には日曜日嚴守は一つの國法となり、之を犯すものは嚴罰に處せられた。一般無智なる國民は、聖書の文字に神祕的の力があると思ひ、我が國で佛敎典の文字を御符に書き之を戸に貼付するやうに、聖書の文字を安樂椅子に貼つて、惡魔除けとした。又北米合衆國に奴隸解放のため南北戰爭が勃發するや、彼らの或者は創世記九章二十五節「是に於て彼（ア）言ひけるは、カナン詛はれよ、彼は僕輩しもべらの僕となりて其兄弟に事へん」とあるを引用して、奴隸の存在は神の御意ごいなるが故に、之を解放すべきでない」と論ずるに至つたのである。

(以下次號)

エレミヤ記の研究 (七)

申命記發見と宗教の改革 (上)

江原萬里

申命記の發見

スキタイ人來襲の噂は唯の噂に終つて、ユダは僥倖にも其の掠奪の慘禍を免れ得た。多年ユダを隷屬せしめたアッシリア大帝國は此の時既に衰微して、その滅亡は最早時期の問題となつた。外よりユダを脅威する者は全く除かれた。而して内には平和繁榮の徵候が見えて來た。之を以てユダの國民はエホバが民の不義の爲め之を罰し給ふと説く預言者は偽りの預言者であつて、國民は依然神の寵兒であり、其の恩恵いや榮ゆるものと確信するに至つた。爰に於てか神に對する感謝の念は盛んとなり、宗教心は勃然として起り、之に伴つて

神の特別の民としての國民的觀念は盛んとなつた。嘗てヒゼキア王の時、アッシリアの大軍が襲ひ來てエルサレムを圍んだ時に、王は預言者イザヤの言に従ひ、エホバの守護を確信して、頑強に敵を防いだ。然るにアッシリア軍中に疫病が流行して一夜にして斃る、者十八萬五千人と稱せられ、アッシリア王セナケリブは圍を解いて歸國を已むなくせしめられた事があつた。然るに今度も亦、エホバはユダを護つてスキタイ人の禍を未發に防ぎ給ふた。之を以て、シオン(エルサレム)は神の都であり、如何なる外敵も之を侵すことは出來ない國は必ず滅ぶことはないとの確信を強めた。

神の恩寵がかくイストラエルの民に厚いのは、彼等は唯一の神エホバの選民として神の榮光を顯はす任務を授けられた爲めである。而して神の選民たるの光榮は、此の民に與へられた契約に基くのである。そこに錄されてある契約の言に忠實であ

る限り、此の光榮は彼等から去ることはない。然らば、如何にして契約の言に忠實であり得べきかイザヤや其他の預言者は言つた。「己をあらひ、己を潔くし、わが(神)前よりその惡事を去り、惡をおこなふことを止め、善をおこなふことをならひ公平をもとめ、虐げらるゝ者をたすけ、孤子に公平を行ひ、寡婦の訟をあげつらへ(イザヤ)と。契約の遵守こそはユダをして獨立を確保せしめ、國威を四方に輝かす途である。今やユダの國中、諸弊革新の氣運は熟した。

偶々ヨシア王の十八年(六百二十一年)神殿修理の際、祭司長ヒルキヤが神殿に於て「律法の書」を發見した。而して神殿修理使シャパン之を携へて王の前に出で之を讀んだところ「王その律法の書の言を聞くやその衣を裂」いて恐懼した。何故かそれはそこに錄されてある言とユダの現状とが、宗教的に道德的に又社會的に、餘りにも懸隔あり

ユダは神の契約に背反して居る事の甚しきに驚き且つ此の書に錄されてある、この背反に對しては必らず大なる禍が國に臨むべしとの預言に恐懼したからであつた。王は此の「律法の書」に基いて國中の大改革斷行を計劃されたのである。

かくて、其の年の過越の節の日に、「ユダの地方とエルサレムとの長老(代議士)を悉く召集し、此の律法の書を悉く彼等の耳に讀みきかせ、而して王は高座の上に立つてエホバの前に契約をなし、エホバにしたがひて歩み、心をつくし精神をつくしてその誠命(まこと)と律法(おきて)の法度(のり)とを守り、此の書にしるされたる此の契約の言をおこなはん」と宣言した。「民みなその契約に加はりぬ」(列王後二三)。王と民との此の誓約協定あつて、こゝに大改革は斷行せられたのである。

先づ第一に神殿の清潔法が斷行された。神殿内の外國文化の表徴である偶像は悉く除かれ、又神

殿の側にあつた淫窟は皆取拂はれた。第二に地方の宗教禮拜の革新が行はれた。今まで道德的に汚穢を極めた各町各村の「崇邱」の祭壇は悉く毀たれ、首府エルサレムの神殿以外の禮拜は嚴禁された。之に伴ひ今まで地方の祭壇に奉仕した祭司は皆エルサレムに召集され、神殿奉仕の祭司と同様に國費を以て其生活は支持されることになつた。

此の改革は、近刊「ユダヤ教大綱」の編者グレスマン教授の云ふ如く、其の徹底的にして、且つ影響の甚大であつた事はルーテルの宗教改革にも比ぶべきものであつた。若し之を我國の例を取れば、大化の革新又は明治の維新にも匹敵するであろう。然し乍ら之は外國の文物又は勢力に刺戟されたためでなく、國民の宗教心の勃發に由つたのである。イスエラルの民は模範的祭政一致の民であつた。神を祭る事即民を治める事であつた。今や地方の禮拜を禁じて之を中央に集中した事は、

地方分權を廢して中央集權を確立した事である。かくして當時勃興した宗教心と國民主義的精神とに由り、外國に對する國家の獨立膨張、國內の統一、及び宗教的道德的綱規の振肅、貧者弱者に對する社會政策の實行を計つたのであつた。

之を只宗教方面のみから見れば、地方禮拜を禁止し、中央集中を確立した事は、我國の明治維新以後の宗教政策よりも遙かに徹底したものであつた。我國では明治維新後も地方の神社は其の儘存置したが、神社は宗教にあらずとしてその宗教的意義を取去つて、只之を國民の祖先崇拜、國體觀念養成の機關とし、皇室中心主義に由る國民精神の統一を確保したのである。ヨシア王の大改革は其の趣旨之と幾分似たところがある。只之と甚だ異なるところは、彼に在つては中央に於ける統一主體が皇室でなく萬軍の神エホバであつた點である。それ故神武の昔に歸へると稱せられた明治維

新が唯物的色彩の濃厚なのに反し、モーセの律法に基くと稱したヨシア王の此の大改革は、イザヤ以降多くの預言者の理想を具體化し、宗教的國民の國粹を遺憾なく顯はしたのであつた。

抑も此の大改革の基礎となつた「律法の書」が現今舊約聖書中に収録されてある申命記の一部分であつた事については、最早學者間に異論は殆どない。只申命記中のごの部分があるかについては多少の議論がある。現在の申命記は明白に二つの相互に酷似した部分から成つて居り、之に二つの序文がある。思ふに之は原本が二つの異本として傳はり、二者共に現今の申命記中に收められた爲めらしい。加之、原本は此の時發見以來改革の遂行に従つて、書記の手に由り盛んに訓詁疏註と添附追加とが行はれ、之が原本中に混入されたものらしくはある。されば申命記は大體に於てエ

レミヤ時代に於ける當時の最高の思想と生活の表現と見られ得るものである。其の中ごの部分が其の時代以前に完成され、之が神殿に於て發見されたものであるかは明白でない、スキンナーによれば大體十二章から二十四章までをそれであるとする（預言と宗教九一頁）。

然らば原本は、何時代誰が書いたかと云ふに、現今の學者は、之を以てモーセが著した五書の一つとする者は殆どない。それと同時に、之を以てヨシア王の時、祭司長ヒルキヤ又はある無名の人或は人々が改革案を起草したのであつて、之を權威あるものにするために、此の時始めて神殿で發見されたモーセの律法の書であると偽り稱したのであるとの説は何人にも顧みられない。多分之はそれから凡そ百餘年前、イザヤの感化を受けた預言者の一人又は數人が起草したものであつて、マナセ王の背教と預言者迫害が甚だ激しかつたため

實行の時期を得るまで神殿内に祕藏し置いたものらしくある。之が偶々ヨシア王の神殿修理に際しヒルキヤに由つて發見されたのである。(最近ウエルク教授は此書は北方イスラエル國にて成り、もつと古いものであるとの新説を發表された。議論は暗示に富み、甚だ敬聽に値する) されば此の書は單なる「律法の書」ではない。イザヤ其他の預言者の精神を以て書かれた律法の書であつて「律法且つ預言」である。イスラエル傳來の契約、即ちモーセの律法を基礎づけるに預言者の史觀を以てし、舊に新を加へ、誠命に恩恵を添え、モーセの十誡にアモス、イザヤの倫理觀ホゼヤの愛憐を混和したものである。

改革の精神

かやうにヨシア王の大改革はイスラエルの民の存在の意義を明にし、傳統的イスラエルの光榮である宗教の精神を具現しやうとする、國を擧げて

の國民必死の努力であつた。今その精神の主要を述べば、

一 神とその民との關係闡明

イスラエルの民の拜する神は他の民族の神と異なり、天地を創造し萬民を支配し給ふ唯一の神である。その神は正義の神であり、全能の神で在し給ふと同時に、又愛憐の神であり給ふ。申命記が特に力をこめて説くところは之である。即ち神の恩恵は優れて深い、されば神に仕へる事程民としての幸福はないと云ふことである。此の神が特にイスラエルの民を作り、これを選び別ち、世に神の在し給ふことを示す任務を授け給ふたと云ふのである。こゝに彼等が民族としての存在の意義があり、國體に對する誇があり、彼らの國民主義がある。

二 選民の義務

さればイスラエルの民は、世界諸國いづれの民族

よりも神に對して特別の義務と責任とを負うた者である。之を以て彼等は神に對してその契約に誠實であらねばならないとされる。即ち神に仕へることは是れ彼等の國民的最大の任務である。之に二方面がある。

(一) 祭祀 エホバは靈なる神にして眼にて之を見奉ることは出来ない。唯靈と眞とを以て拜すべき神である。さればエホバの像を彫む事は相成らぬ。又イスラエルの神は嚴格なる道德の神であるが故に、之を祭るのに異教的なる肉感的儀式と祭禮を以てする事は相成らぬ。此の祭禮は必らず中央エルサレムの神殿に於て、國民舉つて之を爲さねばならないと云ふに在る。此の禮拜集中主義は今まで各町各村の禮拜が異教的儀式的侵潤を受け、エホバを拜すると云ひつゝ、其の實體は異教の神であつたのを匡正するための手段として、申命記が嚴格に其の勵行を主

張したのであつた。當時の地方宗教の革正には唯一の賢明な方法があつたと見られたものである。

(二) 政治 イスラエルの民は神の選民であり神の直屬の民である。他國とその偶像とに仕へない。それ故獨立の民である。又彼等は神から直接啓示せられた聖意なる律法に由つてのみ治められる。それ故自由の民である。此の律法は恩恵深く且つ正義なる全能の神の意志の具體化されたものであつて、日常生活の細かいところまで規定されており、神が聖くあり給へば、彼らも亦之を遵奉して聖き民たることを要求されるのである。此の律法は富者の奢侈横暴を制し貧者に對する憐憫を命じ、弱き者なる婦人小兒の保護、さては宗教心の養成と思想善導等各種の教育法を規定してある。

三 大イスラエル主義

若し、申命記はアッシリアのため滅ぼされた北方イスラエル國に於て書かれたものであるとのウエルク教授の説を妥當とせば、此の申命記に由りエルサレムの神殿に於ける禮拜集中を骨子とするヨシア王の大改革の主眼は、一方に於てユダ國內の諸弊革新であると同時に、他方に於ては、神の民たるイスラエルの國粹を顯揚し、同種、同民族同宗教の北方イスラエル國の殘存の民をエルサレムの神殿に引付け、兩國分裂前即ちダビデ王の盛時に歸へらしめやうとする企てであつたのである。此故に此の大改革は國家社會主義の實行であると同時に、アッシリアの衰亡に際し、嘗て其の爲めに滅ぼされた北方のイスラエルの國土をユダに併合し、大イスラエル主義即ち國民的宗教主義の實行であつた。

ヨシア王に由つて企てられた、「律法の書」に基

く此の空前の大改革は、かく其の意圖の遠大であつた爲め、其の影響も亦甚大であつた。實に異教混和のため頽廢に瀕したイスラエルの宗教は、此の大改革に由つて若返へつたのである。然し乍ら此の「律法の書」は宗教としては決して完全無缺のものとなふことは出来ない。何となれば、完全なる宗教は各個人の心の深きところより發し、各人夫々靈と眞理とを以て神を拜し奉るものでなければならぬ。然るに此の書はイスラエルの民が一民族としてその神に仕へる道を明にしたものであつて、其の規定は個人生活の細かいところにも及ぶも、各人が一個の人格者として直接神に對する關係を明かにしたものではない。此の宗教に於ては、神との關係の當事者は飽くまで國民全體であつて個々の人々ではない。全民族が一教團として神に對すること、これが傳統的イスラエルの宗教の特色であつた。此の事はエレミヤの宗教上の新

貢献の何であつたかを研究する者の牢記すべき事柄である。

されば申命記に基くヨシア王の宗教改革の缺點は、前に述べた通り、神人の關係を人々の心のうちに置かず、之を國民一體としての社會的外形的なる宗教的行爲に置いた點である。それ故、此の改革によりイスラエルの宗教は益々國民主義的精神を旺盛ならしめ、自國の國體をして萬國に比なきものとして之を誇らしめることを得たが、世界は一家族、人類は同胞であるとの心を涵養せしめない。此の宗教は世界何れの國も唯一の神を信ぜしめるであらうが、獨逸は *Usur aliar Gott* と云ひ、佛は *Notre Dieu* と云ひ、各國各々己が國の神の名に於て兄弟相憎み合ふ事をなくする事は出来ない。

更らに又、申命記は神の正義を高唱し、民に對する攝理を説く。然し乍ら、その正義と攝理とが

個々の人々の生活とどう云ふ關係にあるかを教えない。國全體として正義に頼るときは榮え、不義を犯すときは必らず滅びる事を力説するも、個々の義人に何故患難が多いかを説明せず、之に解決を與へない。又正義は必らず現世に於て其の報を得る事を説いて、患難のうちに悲惨な死を遂げた義者の魂に來世の希望を供しない。

此の缺陷はイスラエルの宗教が國民的宗教であつた事に必然に内在する缺陷であつて、現今我國に於て唱道せられる「社會的基督教」と同様に、我等の靈魂の眞劍なる、而して最深なる欲求を満足に足らない。されば此の國民的宗教は更に一段の進化を必要とした所以である。爰にエレミヤの偉大なる貢献があつた。

エレミヤの態度

エレミヤが此の大改革に際して如何なる態度を

探つたかは、エレミヤの生涯の研究中の最大の難關であつて、學者の間に意見の一致を見ない。既に神から啓示を受けて、國の滅亡は人力を以て之を防ぐ事を得ず、民の罪の深刻なる、到底之を洗ひ潔めることは出来ない事を深く感じた。彼は、初めから此の改革の無益を知つて冷然たる態度を採つたと論ずる者も甚だ多い。然し乍ら、當時イスラ

エルの傳統的精神である律法と預言者との成就を期して王以下舉國一致、誠心誠意を以て其の高貴なる國粹の發揮に當つた改革の熱心に、熱情家エレミヤが動かされない事はあるまい。反對か然らずば賛成か、二者中の一つである。凡て誠實熱心なる者には社會の重要事件は何であれ之に無關心であることは不可能である。當時二十六七歳であつて、理想と血氣に燃ゆる青年エレミヤが、此の國民的悔改の運動に多大の同情を有つた事は想像に難くない。彼は既にイスラエルの滅亡を確信し

それを預言した。然し乍ら彼は所謂公式論者ではなかつた。主義に捕はれて化石した人ではなかつた。又人の凡ての善意を冷笑するメヒストフェルスではなかつた。血あり涙ある熱腸漢、然かも尙年若き青年であつた。彼が最初此の運動に賛成した事實は、次の記録を冷靜に判讀する時疑の餘地はない。

エホバよりエレミヤに臨める言、

「なんぢ此の契約の言を聽き、之をユダの人々とエルサレムの市民に告げよ。此の契約の言に違ふことを欲せざる人は詛はる。」(中略) 其の時我こたへてアアメン エホバといへり。……またエホバ我にいひたまひけるは汝すべて此等の言をユダの諸邑とエルサレムの諸街に宣べて云へ、汝ら此の契約の言を聽き之を行へと。……されど彼ら之を行はざりき。(一一・一以下)

「此の契約」とは前後の關係と其の用語とよりして、此度大改革の基礎となつた「律法の書」即ち申命記である事は確實と思はれる。此の契約の言

に遵ふことを欲せざる人は誛はる。此の大改革に反對するものは神に背くものである。國賊であるとの謂である。

抑もイスラエルの民が、神の選民として特別の祝福を受ける條件は、律法を嚴守することに在つた。神は決して彼等に對して依怙最負であり給ふのではない。彼等が神の聖意の啓示である律法を行ふ限り、彼らを恵み、之を神の民とし給ふたのである。而して眞の神エホバの神性は、人の知り得べき限りに於て、律法のうちに顯はれたのである。此を嚴守せずして、然かも尙神の民たることを誇らば、その神はモアブ人のケモン、アムモン人のモロクと何の異なるどころあらう。若きエレミヤが「此の契約の言に遵はざる人は誛はる」との言を聽いて、「アアメン エホバ」と叫んだのは、神を愛し國を愛する彼の本心から出た聲であつたと私は思ふ。従つて彼は熱心に此の律法の書を國

中に宣傳し、改革事業を促進せしめたに違ひあるまい。

預言者と其の故郷

然るに彼が熱心に「此等の言をユダの諸邑とエルサレムの諸街とに宣べて、汝ら此の契約の言を聽き、之を行へ」と勸告した時に、意外なる反對が意外なる所から起つた。人もあらうに、彼の郷里アナトテの人々、殊に彼の「父の家の者」が彼に反對し、其の生命を奪ふとしたのである。

抑も此の大改革の最も顯著な要點は、地方禮拜を禁じ之をエルサレムの神殿に集中することに在つた。然るにソロモン王の時以來、エルサレムの神殿に奉仕する祭司はザドクの後裔であつて、彼は嘗てソロモン王の王位承繼に就て、神の契約の櫃の守護者エリの子孫、而してエレミヤ一家の祖、アビアタルと相争ひて勝つた者であつた。アビア

タルは之がためアナトテに左遷され、ザドクの子孫のみ獨り中央の神殿の祭司として時めいたのである。然るに今此の大改革の結果エレミヤ一家の仇敵たるサドクの子孫が益々勢力を得、エレミヤ一家は中央に召集せられ、其の下に隸屬しなければならなくなつたのである。此の憤慨に加ふるに、思はざりき、己が家の青年が之に賛成し、國中に改革の宣傳をなさうとは、彼の一家の者共が之に憤激したのは想像に難くない。

エレミヤは其の始め、少しもこの事に氣がつかなかつた。それ程彼の心は公事で一杯であつた。然るに或る時或る機會にそれを密告されて、危く己が生命を全うしたのである。

一八 エホバ吾に知らせ給ひて吾悟りぬ、

かくて吾彼らのわざを見ぬ。

一九 それまで吾は屠所に率かる、

小羊の如くすなほなりき。

吾は知らずありき、彼ら吾を、

害そごなはんとてたくなめることを。

「われら生木なまきを切倒さん、

彼を生ける者の地より絶たなん、

その名を記憶おぼへゆる者なからしめん」と(一一)

エレミヤは己に對する陰謀を知つて激怒して神に之を訴へ、神自ら郷里の人々に對して仇を報ひ給はんことを祈つた。エレミヤは舊約の預言者であつて「されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり」(マタイ五・四五)と宣ひしイエスではなかつた。彼の神は何よりも正義の神であつた。それ故不義が此世に存することは彼の堪えざる處であつた。彼は神から彼の迫害者には怖るべき運命が待つてゐることを示されてやつと満足したのである。(二〇——二三)。

然し乍ら現世に神の正義が嚴重に行はれることを確信した舊約の預言者であつた彼は、スキンナ一の云ふ如く其の「最後の預言者」であつた。そして「最初の詩人」であつた。(預言者と宗教二二三)

彼は神の正義と現世に於けるその嚴格なる攝理とを須臾も疑はなかつたが、然かも誠實に神に仕へる義者に對して此の迫害があり、預言者は故郷に尊ばれない事を経験して彼の心は暗くなつた。彼の如く情濃かく人なつこき者が、其の郷里の人々のみならず、彼の父の一家の者、その兄弟達までが彼を欺き、彼の生命を求めた事を知つた時の彼の心は傷き痛んだ。主イエスも亦神とその命に忠實であり給へば給ふ程、その郷里の人々に誤解迫害せられ、又兄弟に棄てられ狂人とされ給ふた。(マルコ傳三・二一以下、六・一以下、ヨハネ傳七・三)。何故に義人に此の苦難があるか。何故に神の人に此の孤獨があるか。エレミヤは神の此の世に對する攝理

について、在來のイスラエルの宗教たる申命記が解答し得ない深刻なる質問を神に向つて發するに至つたのである。

然し乍らエレミヤはイスラエルの宗教の高調する神の正義と公平とは毫も之を疑はなかつた。只彼が神の正義を確信し、其の攝理が嚴重に此の世で行はれて居る事を信じやうとすればする程、事實に於て義者が苦しみ、不義者が榮えて居ることを見るのを奈何にせん。義しき鞫ミユクをなし、人の心腸を察さぐりたまふ萬軍のエホバは、何を義しき者に對してしやうとなし給ふのであるか。そも神の正義とは何か。

一 あ、エホバよ汝は義しく在す、

吾いかで汝と諍あざわはん。

されど義しき事柄につきては、

吾汝に申し言あり。

何故惡人の道は榮え、

不實の者は安らかなるか。

二 汝彼らを植え、彼らは根づき、

彼ら育ちて實まで結びぬ。

彼らの口は汝に近くあれど、

その心は遙かに遠し。

三 あゝ、されどエホバよ汝吾を知り、

我が心の汝と偕なるを試み給へり。

彼らを羊の如く屠所につれゆき

屠りの日のために備へ給へ。

こゝにエレミヤの神と直接なる彼の深い宗教心の顯れがある。傳來のイスラエルの宗教が解決しない人生の疑問に對して、更らに深く神に其の解答を迫りゆく彼の眞摯がある。彼の宗教は只社會的、政治的、經濟的、幸福にない、靈魂の深處に於て神と語り、神に質問し、其の満足なる解答を得て神

のうちに安息を得るまでは安息を得ない靈的本能の欲求である。彼は實に最も代表的イスラエル人であつた。

然るに此の眞のイスラエル人が神を愛し、國を愛し、家族郷黨を愛し、此等に仕へること甚だ熱心であればある程、愛する者から棄てられ迫害されて見て、彼はいち早くも此の度の大改革に由つて積弊を刷新し、本來の純粹に復古しやうとしたイスラエルの傳統的宗教の大缺陷に自ら躓いたのである。それと同時に彼は國人の何人にも先じて、その心に眞の神を求め、此の改革が企てた理想以上の宗教的眞理の深みにと達しつゝあつた。

彼の質問に對して神の答は次の如くであつた。それは答としては明白を缺いた。然し乍らそのうちに神の智慧がある。神の答は理論ではない。エレミヤの生涯がその答である。

五 汝歩者と走りて疲れなば、

いかで騎者と競ひ得ん。

平安の地に心安からずは

ヨルダンの叢くさむらを旅し得ん(第二章)。

神はエレミヤに對して義しき者は此の世で必ず安樂に、物質的幸福を得ると云ひ給はなかつた。却つて今後更らに大いなる迫害に遭ふことを告げ給ふた。若し郷里アナトテに於ける今時の輕ろき苦難に堪ゆる事が出来ないならば、如何で今後エルサレムに於ける更に困難なる任務を果し得やうぞ。かく宣ひて、彼がその腹に作られさる先に預じめ神に知られ、母胎を出でざる先に預じめ神に由つて定められた萬國の預言者たる任務に向つて更に勇敢に進むべきやう、神はエレミヤに勧め給ふたのである。

義者たるの報ひは此の世の物質的幸福ではな

い。その安樂ではない。「神の御意ごいを知り之を行ふこと」その事自身である。「神は預じめ知り給ふ者を御子の像に象らせんと預じめ定め」預じめ定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光榮を得させ給ふ」(ロマ書八・二九及三〇)。之がためには一難又一難、之を経る度毎に更らに大なる人生の悲痛と患難に堪え得るやうにせられるのである。正宗の銘刀の出來上るまでには幾萬回か水と火との中をくぐり、數萬度か折り重ねては鐵槌をもて打ち敲かれるのである。かくして始めて神が彼を召し給ふた時に約束し給ふた「鐵の城、銅の垣」とせられるのである。

憂鬱の真中より堀出され

燃ゆる恐怖に灼熱せられ

瀧つ涙の湯に投ぜられ

滅びの激感に打ち敲かれ

鐵は形成りて用をなす。

(以下次號)

復活の確實性に就て

小栗 襄 三

主イエスキリストを信する者は、主御自身が死

より甦り給ひしが如くに、我等も亦彼の日に死を足下に踏躰り確かに甦り得るであらう乎。又其資格があるであらうか、且又主に在りて既に寝れる者、主の御胸に懷かれて安らかに寝りし、我等の愛する者と偕に、確實に來るべき日御前に在り得るであらうか。我等の信仰、即ち主イエスキリストを信する信仰は、唯單に罪惡に對する贖ひを以て足り、贖罪の歡喜と、現在の滿ち足る恩寵にのみ陶醉し、感謝の連聲に止まり、未來は單に希望と攝理に信賴し終る可きであらうか。

併乍ら、我等の信仰的要求は、主に在る者の、一人去り、二人去る時に、復活の確實性に就て考へざるを得なくなる。果して我等信徒の復活が確

實であるであらうか、此れ人生に對する大なる疑問符であると共に我等が衷心の願望である。然して聖書は此問題に就て何を語り、何を教ふるであらうか。

復活に對する聖書的論證は、先づ贖罪の確立と不可分である事を教へる。即ち贖罪の確立そのものが復活の確立である事を教へる。従つて贖罪の前提なくして復活は成立し得ない。贖罪の信仰なくして復活の信仰は在り得ないのである。然らば贖罪とは何を意味するのであらう乎。

贖罪とは主イエスキリストを信する事に頼つて我等が神の前に義とせらるゝ事である。此の芥子粒程の信仰が彼の十字架の死を信じ、信する事に頼つて我等の罪が彼に、完全に贖はれしを體驗する事である。此の體驗が確實であるか、無いか、と云ふ實驗は、その信仰が患難を喜び、其患難が忍耐を生じ、忍耐が練達を生じ、その練達が希望

を生ずるや否かに頼つて、確實であるか否かが先づ決定せらるゝのである。

主は我らの罪の爲めに付され、我らの義とせられん爲に甦へらせられ給へるなり

と、誠にこの信仰を確立せん爲めに彼れ先づ甦へりて、信仰の第一歩に、即ち信する者を義とし給ふ、確證を與へ給ふたのである。

かく我等彼を信する事に頼つて、練達より希望を生ずるに到り、神と和ぎを獲て平和に成りし時に、信仰の階程は此處に停らない。日々彼の恩寵に活くるのみならず、更に主キリストイエスを我が衷に宿し、彼と偕に生活し、彼の生涯を我等の生涯と爲すに到らなければならぬ。即ち

我キリストと偕に十字架につけられたり、最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。

と、彼の生活内容が我が生活内容となりしならば

我等も亦彼と共に活くるのである。現在に、未來に、然り彼の日に、である。

然るならば、誠に「若しイエスを死人の中より甦へらせ給ひし者の御靈なんちの中に宿り給はゞキリストイエスを死人の中より甦へらせ給ひし者は、汝らの中に宿りたまふ御靈によりて汝らの死ぬべき體をも活し給はん」と、主の御靈我が衷に宿るならば、神はイエスを甦へらせしが如くに、我等をも甦へらすと云ふのである。

罪なき神の羔、聖にして、今ま神の右に坐し給ふ神の獨子の贖罪が、完璧にして我等の頭髮一本に到る迄、その恩典に浴するを信すれば信する程復活は確實性を帯びるのである、而して彼が我が衷に宿り、我れ彼のものとなつた時に確實であるのである。これはパウロの論證であると共に、我等の信仰の基礎である。

翻つてキリストの復活の事實を視るならば、此

れ神の人類に約束し給へる誓約に外ならない。イエスは斯くも優れたる契約の保證となり給へり」と、彼は保證のみならず、彼自身は「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きざらんと、自己を證明せられ、彼れ甦へるに先だち、死にて四日になりしラザロをも甦へらし、自らその力を示し給ひ、然るのち、彼れ十字架上に死し、三日目に甦へり給ひて我等に契約の保證を爲し給ふたのである。かるが故に彼を信じ、彼の衷に活くる者の復活は確實である。

一昨夏の或日曜日の夕の事であつた。エルサレムのヨツバ門外に一基督教徒の葬儀に列しシオンの墓地向ふ。六百の若者は黒衣を纏ひ、手には長管のトランペットを持つて棺側に侍し、シオン山丘に至る、僧侶の簡單なる祈禱後、棺は静かに小石多き瘞土中に下される、時にトランペットは

東方モアブ連山に向ひて一齊に吹き鳴らされ凱旋の讚美は高く低く、暮色漸く迫るケデロンの谷に響き渡るも前山に遮られて打返し、打返され、山彦となつてシオン全山に反響し、時の過ぐるのに従つて讚美と歡喜と、希望の曲は交響樂となつて聖都を包み覆ふ。哀悼の憶ひは何時しか晴れ、想ひは復活の朝に走る、誠に基督教徒に相應しい葬儀であつた。

誠に我等に何は無くとも、復活の希望、復活の信仰は在る、然る故に「我等落膽せず、我らが外なる人は壞るれども、内なる人は日々に新なり。それ我らが受くる暫くの輕き患難は極めて大なる永遠の重き光榮を得しむるなり。」である、時來るならばトランペット鳴り響き主イエスキリストに在りて寢れる者と相共に主の御前にて相見みゆる日があるのである。

若き家庭の死別

鈴木 敏 元

宇宙に於ける最大の希望と悦びとの一つは疑も無く人の創造であつた。げに創造主は人類の始祖を造り給ひし時に之に對して大なる満足を持ち給ひ、生めよ繁殖よ地に満溢てよと、之を祝福し給ふた。又我等人生の爲めに太陽も月も星も萬有一切を備へ給ひしかに見える、人間一個の價値たるや何ぞ大なるである。

翻つて我等個々の人を見るも、一人のみどり子の出生は大なる悦びであり、希望である。夫れ故に、永久に祝福さるべき此生を否定する所の死こそは、實に明るかるべき人生の半面に横たはる大なる暗黒であり、呪詛である。然り人生最大最後の敵は正に此死に外ならない。死てふものを亡ぼし、之に勝ち得たる時に於いてのみ、人生眞の幸

福と光明とが臨むのである。パウロの發したる「死よ汝の勝は何處にかある、死よ汝の刺は何處にある」との凱歌こそは、人類の過去現在未來永遠に亘る所の眞實なる歡聲なるべきである。

然るに神を求むることをせざる世の多くの人は、此人生究極の大問題たる死に就いて、只怖るべきものとして、之に觸れんことを好まず、最後まで之を忌避しつゝある。併し乍ら死は餘りにも現實である。死者を僧侶の營む只一片の讀經のみを以て葬り去り得ないのである。噫余は最近如何に惻隱と同情との心を寄するも及ばざる、若き人の死を目撃して深く之を感じた。

最近丁度一ヶ月前余の隣家に、新家庭を造りしまゝなる一組の若き夫婦が住居するやうになつた。新郎の年齢は廿六歳、新婦は十九歳だと云はれて居る。而して住居後程なく新婦が病みて或る病院に入院した、主人は新妻に付き添ふて勤めの

餘暇を病院に過し、看護と慰藉との勞を盡した。幸其甲斐ありてか、七日間にて病癒えて我家に戻り、世の常ならぬ麗はしのホームを營み、其様は人生の祝福其の物の如くにさへ見えた。

正にさもあるべきことである。生の始めが大なる悦びたらんには婚姻が之に次ぐ祝福たるべきことは當然であるからである。主もカナの婚禮の夜之を祝して水を更へて葡萄酒となし給ひ、又自らを常に新郎に譬へ給ふた程であつて、神の造化の目的の大半が人の婚姻に於いて成就したるかの如き觀ある此新ホームこそは、人の上下を問はず、いとも祝福さるべき筈である。

然るに、噫此新家庭は新妻の病に次いで、今度は夫が昨朝、何時もの元氣と希望とに満ち、幸福そのものゝ如き面容にて、今宵は早く歸宅すべきことを告げ會社へ出勤したが、勤務中かりそめの病の手當ての爲めに附近の醫師を煩はしたが、過

失よりして其翌日の正午卒然死去し、年の瀬なる其夕、世の人の新年を迎ふるよろこびを前にして、彼は悲しき遺骸となつて彼等のホームに連れ戻られたのである。人信仰あるか無きかは論外として、何物か之にも優るべき悲劇があらうか、婚姻と死を相前後して迎へし新家庭として。

然らば我等は此場合何を以て之を慰藉せんか。それは基督を信することによつて與へらるゝ來世と、死者の復活と再會の希望とが實現さるゝことの外には何物もない。主は我等信するものに、我等が一度び喪ひし愛するものを、來るべき復活の朝、何處よりかは知らぬが携へ來つて彼に賜ひ、未來永劫再び別離の悲しみなく、過去の涙一切を悉く拭ひ給ふであらう。神は斯くして此の人生最大の悲嘆事より歡喜と勝利とに至るの道を自ら備へ給ふた。造化の神のなし給ふ所として之に勝る恩恵はない。神は愛也、之を信するものは幸なる哉。(一九三一年十二月卅一日誌す)

柏 木 通 信 (第十五信)

齋 藤 宗 次 郎

柏木の近状

○内村鑑三全集將に生れ出でんとす。幾多の荆棘を排して、神の御愛護の下に生れ出でんとす。誰人の手に困り、如何なる方法に依つて成りしかを問ふ勿れ。時は來れり。ベツレヘムならぬ東京を埋むる幾百萬の市民が、猶ほ夢にだも知らぬ間に彼は無限大の重任を擔ふて魔の一隅より生れ出でんとす。古來、人類の福祉に關する大事實の起るや、之に對抗し之を妨害せんとする暗黒面の光を廻りて盛んに狂躍するを見る。洵に彼の出生は、我が國民の靈性の痲痺、我が東洋の殺伐擾亂、我が世界の武裝的平和の暗愴たる現狀と密接の關係を有するや論を俟たない。彼の使命は實に、聖書の眞髓を、身を以て闡明することであつた。人類は既に比類なき眞の光を賜はりしに拘らず、千九百年間、生れながらのカトリック根性を脱し得ず、常に律法への逆轉と人智への妥協によつて曲解又曲解縱に勝手な解釋説明を施して自ら空望に安んじ居る有様である。人々を此桎梏より解き放ちて、神の御前を永久に義しく歩ましむべき道を示すは彼が主に委ねられし天職であつ

た。世に之に勝るの清き大事業は無い。そして人々の之を信するに先だちて、サタンは克く此事を知つて居る。本全集の發刊を一面より觀れば正に斧を樹の根に置かる、生死兩分の機なるが故に、サタンの誘惑手段も亦尋常の熱心ではない。去らば予に對するかれの策略は果して如何。パウロ以後の基督教史上に於ける恩師の特異の位置と、其畢生の事業の眞價に就て予の所信を狂はしめ、更に祈の心を奪つて、單に俗務の産たらしめんとする是である。予に取りては苦痛の極であるが、然し之と戰つて勝ち行くの感謝は譬ふるに物なしである。敢て問ふ。親愛なる我が信仰の友は、我は恵みによりて基督教者とせられたといふ一般信徒の喜びの外に、獨立自由(無教會)の信仰の戰士たる新しき責任の懸れるを自覺するの要なきか。我等若し退嬰の態度に止り、進んで主の命に従ふことなくば、持てるものをも取る、の禍なきを保し難い。天國の港は我等の唯一の目標である。怒濤を蹴つて漕ぎ行かすば終に達することは出來ない。時は迫れり、今やパイロットの麾く手は高く舉れり、選ばれし少數の者集れ！ 祈れ！。新春の陽光編輯室に普し。靜かに獨語の座を起つて椽に出づれば、庭前の福壽草は黄金の小冠を翳し、紅白の梅花は祝福の歌を口唇に

泛べて、忠實なる自然の心を神に献ぐるを觀る。

○新潟の梨實、石狩川の鮭。岩手山麓のバター、山形の芋果、東都の餅菓子、千葉の鶏卵、九州福岡の鮎、朝鮮の栗と雉と鴨、予は先づ之を我等に贈られし諸教友の好意を謝す。此等は決して單なる餽贈品又は施與物ではない。全集に對し、我等に對する祈禱の物質化せるものである。尊きかな此愛の贈物、我等は之に接して、天地を擧げて翼賛する應援歌の響くを聽いた。百年の後、此全集を手にしてイエスキリストの父なる神の恩寵を讚美する友は、此清き懐しき一事の、我が昭和の日本に有りしを知らんことを望む。

○二月四日朝、熊本市回春堂病院長ハンナ・リデル女史の長逝を新聞紙によつて知つた。彼女の我同胞なる癩病患者に對する純潔の愛、彼女を産みし大英國の譽れ、彼女を享けし日本の幸福、而して彼女が毎年一月、内村家より寄與し來る同情金を用ひ、其十二日を特にルツ子デーと定めて終日在院患者を樂ましめ、滿腔の慰安と歡喜に入らしむる美はしき事柄、其所に現はる、主イエスの愛を想ふて、其の奇しき恵みに感涙なきを得なかつた。等しく神の愛に生くる日支友邦の兄弟等、互に殺戮し合つて滿蒙の野の白雪

を染め、長江の流れを汚して、其罪に泣くを知らざる無懺の行爲と之を對照し見て、神の榮光の業と惡魔の滅亡の業との別を明かに認めた。ア、人々何時まで暗を慕ふて一步步々末の日の審判禍難に近づくを怖れざるや。祈る、嬢の靈長へに安かれ。嬢の遺業に祝福あれ。而して殺人に生くる人類が罪の赦しを冀ふて、愛の神平和の神を一途に仰ぐに至らんことを。

日曜日の集會 主の僕と雖も、此世に在りては詛はれし地に勞苦し、荆棘と薊と戰ひつ、日を送らねばならぬ(創四・一七)。去れど又主に従ふ者は、神を信する者の爲に設け給ひし安息日に導かれて、六日の後には思ふ存分自由の空氣の中に、靈の饗宴に預ることが出来る。萬全の聖圖に信從して、既に永生の能力と歡喜とを味ふことが出来る。

一、歡喜平和のイエス 佐々木
一、雲 齋藤

一、人類最初の造船家ノア 山本
一、半生の思想と救拯の恩恵 鈴木

斯く題して語るを聽く時にも約束の聖靈は各自に降り、其心を開きて眞理を示し生命を授け給ふ。我等の國は天に在れど、地も亦神の義と愛とを證して歇まない。罪に死ん

で罪を赦されて、始めて世に生き甲斐のあるを感じる。

洗足會 案内狀は九段の高山兄より發せられた。一月廿一日夕、千代田の城に陛下の祝福を冀ひ、土石の東京に市民の安否を思ふて一同席に着いた。靜かに向山堂の樓上に座して、我れ山に向ひて目をあく云々の詩人の赤心を思ひ出で、痛くエホバ神の扶助を感じた、先づ一椀の番茶を啜りつ、兄弟等の視線を結んだ丈で、言ひ盡し難き愛心の燃ゆるは何故ぞ。一語二語と漸次語り出づる言葉が自ら喜びの音づれならざるを得ない。聽て歌は歌はれる、聖書は誦まれる、恩寵の事實は述べられる、神の爲の祈は祈られる。實に信仰の風は自ら吹き、愛の泉は自ら流るゝの景觀である。我等今若し全世界の中の何れの基督者と相見ても、亦同じキリストの欣びに入るであらう。眞に主一つ信仰一つなるかな。是れ我等の様に感ずる所である。視よ十時近し、いざ別れ歸らん。斯様にして本年最初の洗足會も亦又なる神の御手に獻ぐるを得た。次回は何處か。

○モアブ婦人會 異邦モアブの僻地から貞淑従順のルツを起して、信仰の祖アブラハムの裔に加へられしは、何といふ神の深き御計ひであらう。預言は二十世紀の日本にも實現して、所謂正統派ならぬ我がモアブ婦人會は、月々に神

の恩寵と平康とを蒙りつ、ある。一月第三水曜日に内村家に開かれて、熱心に使徒行傳を研究し、心を協せて祈るを知りし予は、獨編輯室に在つて姉妹等と同様にアームンであつた。○日頃健康にて全集の事務の進み行く様を喜ばれつ、ありし恩師夫人には突然鼻出血があつて、それが數日間止らぬ爲め俄かに大學病院に入院せられた。幸病勢の募る患ひないと診察を得て一同愁眉を解いた。將に警世の巨彈否平和の先導者を戰亂の世に送り出さんとするに當り此事あるは、亦神の測り難き御心の存するに相違ない。モアブ婦人會は之が爲に特別祈禱會を久山姉宅に開くこととなつた。父よ御心に適はゞ夫人の病を醫し給へ。

○星野鐵男氏記念會 若き我等の同志はドシノ、神の召を蒙つて此世から去り行く。星野鐵男氏も亦其一人である。我等は肉と情とに眼を閉ちて只管に神の聖業を讚美するのみである。氏召されて既に三閱月、友人の心は默し難い。茲に南原植木の諸氏發起人となつて、二月十三日柏木今井館に記念會を催すこととなつた。多分知友相集ひて、氏の恵まれたる信仰生涯の上に十字架の輝きを稱へ、併せて最愛なる遺族の祝福と同志の覺醒の爲に祈ることであらう。

祖父の書翰 (六)

江原萬里

私の目的は祖父の書翰を通じて彼の志を述べることにある。高野山に於ける村上眞輔の子等の親の敵討を書くことは其の目的でない。只此の事件は祖父の生涯に多少關係するところがあるため、勢之に觸れるのである。

抑も此の仇討については、現今二つの正反對の意見がある。その一は此の仇討を美學とし、その正當なる事を是認する者であり、第二は之を以て維新志士の殉難であり、不當と見る者である。私は彼等のために暗殺された者の遠き親戚として自然後者に同情し易くある。夫れ故、勉めて第三者として公平ならんとし、事の真相を驗討するため、寧ろ村上一家を同情の眼を以て見た。私の參考した主な材料は、村上一家のため暗殺された野上鹿之助の實子にして、祖父の家を嗣いだ私の叔父、故鞍懸勇三郎君の草稿祖父の略傳及び書翰(いづれ出版の豫定)、太田由喜馬著明治維新赤穂志士の高野の殉難、及び後水處著明治秘史高野の復讐である。其の中村上一家を極力賞揚し、十三人組を極力貶した「高野の復讐」中に載せられた材料を精査して、私は

遂に此の著者と殆ど正反對の意見を有するに至つた。

文久二年暮の夜、森主税及び村上眞輔を殺害した赤穂藩の小身者なりし十三人は、殺害趣旨書を大目付及び月番の邸内に投じて其の夜脱藩、京都の土佐藩に走つた。豫てより此の事を期待して居た土佐藩では賓客の禮を以て之を歓迎し、其の中負傷した者には藩主は刀を與へ、又長州藩にても醫者を差向けた。かくて薩長土の有志協議の上、幕府の嫌疑を避けるため彼等を住吉に移し、土佐藩にて保護する事となつた。

赤穂にては藩の主腦者兩人共殺害された翌日、此の事が知れ亘るや舉藩「正義正義」と叫んで之を喝采した。彼等のため蟄居せしめられて居た森續之丞は此の時から藩政の實權を掌握するに至つた。而して彼は門を出るや其の第一歩に於て、取り返へしのつかない大なる蹟をなした。若し此の時彼が善後處置の第一歩を踏み誤らなかつたならば、恐らくは仇討はなくて済んだであらう。

森は國老と用人との殺害を以て、宛かも國賊が法律に由つて刑に處せられた者の如く之を見た。それ故加害者を罰せんとせず、兇行の翌日一味の者なりとて自首した山下恵助及び野上鹿之助は其の儀に及ばずとされ、却つて種々役

儀仰付け之を賞した。他方被害者の一家を迫害し、國老森主税の嗣子及び用人村上眞輔の一族に閉門を申付け、青竹を以て之を鎖ざした。村上の次子河原駱之輔は大阪にて兇變を聞き、驚いて歸宅するや、即夜喚問、役儀御免、永の御暇を申渡した。己むなく翌朝駱之輔が妻子を残して郷里を立去らんとするや、豫てから村上一派に心よからぬ藩中の若者が多數、路に要して彼を殺さんとすると、報があつた。彼は、大目付に暴徒を立去らせんことを願出た。然るに大目付は之を拒絶し、暗に自刃をほめかした。爰に於て悲憤やる事なく、切腹を願出たところ直に聽許された。彼は親戚妻子悲嘆の涙のうちに雪冤在天と書し終つて美事に割腹して相果てたのである。

既に父は非業の死を遂げ、兄弟は閉門となり、次兄は眼のあたりに自刃す、眞輔の子等が無念に堪えなかつた事は想像に餘りある、彼等が藩に向つて公平の處置を期待する能はず、自ら立つてその仇を報じやうとしたのはさこそと思はれる。由來赤穂は四十七士の本場である。藩では此の事を察知して、一族の者を喚出し、復讐は絶對にしないことを宣誓せしめたが、彼等はそれで思ひ止まるべくもない。何故父の死は不問にせらるゝか、兇徒は何故之を罰しない

か、何故一家は閉門に、次兄は切腹しなければならぬか、その理由を明示せよと彼等は迫まつた。藩中彼等に同情する者も次第に増した。爰に於て當時江戸藩邸に在つた老侯の叔父森徹之助が歸城之を裁斷する事となつたのである。祖父が森續之丞に「一點惜生」の念なく之を啓沃すべしと忠告したのはその時であつた。

然るに徹之助も一刀兩斷に紛糾せる事件を裁定し兼ねた。結局、村上一門の閉門を解き、一同罪なしとし、他方土佐藩より十三人の引渡を得て之を罰しやうとした。由つて續之丞は祖父に書を寄せて、犯人引渡の交渉を依頼した。これがため祖父は土佐藩と赤穂藩との間に居中調停を試み、十三人が脱藩して大藩の庇護を受けるのは、己が生命を惜む者の如く見え、武士道の本義に反するを以て彼等は歸藩自訴すべき事、然し乍ら其の行爲の動機は皇國のため又藩のためを思つたからである。故に土佐藩は彼等の助命を赤穂藩に乞ふ事、而して赤穂藩は其の乞を容れ、之を赦免する事、之にて兩者の打合はつき、文久三年三月十四日彼等は歸藩する事となつた。

土佐藩との交渉は圓滿に濟んだが、之を以て藩中の村上一族を満足せしめる事は不可能であつた。此の時森續之丞

は病氣の故を以て退役し、村上派の勢力は増して來た。それ故十三人が歸藩するや、直ちに彼等及び其の始め其の儀に及ばずとされ、却つて厚く遇せられた山下惠助に謹慎を命じ、次で之を揚り屋に入葬申付けた。藩にては彼等を悉く死刑にする方針であつた。西川榊吉は獄中にて此の事を聞知し、土佐藩に書面を送り、せめて、藩論が尊王攘夷に一致する日までは生き度いと慨嘆した。

奸賊殘黨、森徹之助へ様々手段を以て十三人は勿論、外有志の者迄斃し可申奸計相働居候様子に候。尤も十三人は元來身命を擲ち居候得共……唯今敵科の處置相成候ては甚以て残念不少候……當藩の流弊は幾年過ても同様の事にて、遂に皇事を勤め候事相成不申、而已ならず、主家の安危にも係り可申と存候。此の段長嘆息の次第に候……一藩中正義成立、尊王攘夷の論一致仕候迄は存命在度存候。

此の書を讀んで彼等の心事を邪推曲解するのは不當である。此の書は村上派のため差押へられたが、土佐藩では此の事を聞知し、赤穂藩の違約を詰り、其の他の諸藩士も追しかけ來り、若し十三人を死刑にするならば、同時に重役も責任を明にし切腹せよと迫まつた。赤穂藩にては外より

と内よりとの壓迫に、十三人の處置に困じ果てた。

當時祖父は京都から津山に歸へらうとして其の途中、赤穂藩の北川省吾に追ひかられて會つた。北川は祖父に調停を「手を合せて頼んだ」そうである。そのために祖父は再び引返し、津山藩には暫時滯留願を差出し、調停を試みる事となつた。次で江戸より老侯歸城、村上の子孫には後目を相續せしめ、他方獄中の山下惠助及び十三人を赦免し、下級の「領内見廻役」に命じ、又野上鹿之助の謹慎を解いた。祖父は此の功勞に由つて赤穂藩より感謝され、追放されて以來始めて名譽を荷うて故郷を訪ねる事が出來たのである。

然るに村上一族が此の處置で満足する筈はない。父の死は國賊の汚名こそ雪がれたれ、之を殺した者は罰せられない。兄の非業の死は思ひ出すだに涙の種である。雪にそれのみでない、父及び兄が憎みに憎んだ祖父が今や時を得て故郷に錦を飾つて歸へり來り、藩主以下之を歓迎したのを見て、憤懣は極度に達した。かくなる以上は自ら起つて仇を報する外なしと決心するに至つた。彼等は其の實行のため或は劍術を學び、或は助力者を得るため、準備をおささ怠りなかつた。

編輯餘録

○先年支那に國民政府成立し、我が國朝野の意見はこれで支那は統一の緒に着いたと論じ、又其の年不戰條約が調印されて戰爭は當分ないと云つた。其の時私は本誌上で「彼は亂れんがための小康にして、日支親善は滿蒙問題のみを以てするも破れ易くある」と云ひ「此の紙とインクとに頼り、人類は此の地球より戰爭を追放したりとは何人も思はざる處である」と云つたが、こんなに早く、滿蒙に、上海に、兵火相交り、同胞相屠る事件が起るとは豫想しなかつた。世界戰爭の端緒は始まつた。此の先は眞黒暗である。

○然るに我等普通の人間にわからない事は此の世の指導者の頭腦である。戰爭は現に盛んに戦はれ乍ら、日本では不戰條約に少しも背反せずと云ひ、戰爭防止を任とする國際聯盟も亦只戰爭勃發の危険があると云つて居るだけ。火事は盛んに燃えて居るのに、此の位人を馬鹿にした事はない。

○之に類する事は過去百年間英米佛獨の間に幾度もあつた。英佛は凡そ九度南阿に事を構え、米國は千八百五十年以來六十年間に五十

三回も中米に兵を遣り、ニカラガのグレートワンはそのために焚き拂はれた。然かも之は戰爭でなく、強國が弱國に對する自衛權の行使であるそうだ。あゝ平和、お前位人類に由つて尊敬され乍ら、常に馬鹿にされて居る者はない。此の世の支配者は民の良心を軽く癒して「平和なきに平和と云ふ」のである。

○然し乍ら馬は馬であつて、如何に鹿と云つても鹿ではない。戰爭は既に始まつて居るのである。我が國の輿論は「日支親善を謀るため」「日支間の貿易を促進するため」否「滿蒙の天地に人類の理想國を建設するため」戰つて居るのだと云ふ。若し之が僞善ならずして何が僞善であらうか。愛國心とは利己心を國家に擴大せるものなりとスベンサーは言つた。一體人類の理想國が軍艦と爆撃飛行機とで建設出来るものと心から思つて居るのであるうか。若し然らば松澤病院に入院すべし。

現代は確かに正氣でない。

○「なんぢ此の民に告げて云へ、酒壺に酒滿つるならん」と。若し彼ら汝に「酒壺に酒滿つるならん」とは知れたこと、おれたちそんな事を知らないと思ふかと云はば、其の時汝彼らに云へ、「エホバかく言ひ給ふ。視よ、わ

れ此の地に住む者は王と貴族、祭司と預言者、否ユダの國とエルサレムの全市民を酔ひつぷさん。われ彼等を互に打ち合せ、父と子とを諸共に打合せさん、(エレミヤ)と。今や神は日支兩國を罰するために酔つぶし互に打合せ給ひつゝある。先づ支那國民の不誠實を而してやがて日本の不信仰を。

○私は今日程日本の將來を暗く感じた時はない。爆彈は將に金匱無缺を傷けんとした。ピストルは確信ある政治家を斃した。金と暴力の支配する社會、正義委を潜め、僞善公行の世の中、

黒がりとならぬ間に、
汝の足がたそがる、

險しき山路に躓かぬうち、
榮を汝らの神エホバに歸せ。

汝ら光を待てど神暗く、
眞つ黒闇となし給ふ。

されば若し汝ら聽かすば、
心ひそかに我が靈魂は泣く

汝らの驕慢のゆゑ
我が眼に涙流るゝ(エレミヤ)。

今となつては巨萬の富を擁するも無効。若し己が子又は孫のことを思はば、神に歸れ。

内村鑑三全集 豫約募集

体裁 四六版、四十五字詰十八行、各卷大凡六百五十頁
 卷數 二十卷

第一卷	初期の著作	上	第二卷	初期の著作	下
第三卷	舊約研究	上	第四卷	舊約研究	下
第五卷	新約研究	上	第六卷	新約研究	中
第七卷	新約研究	下	第八卷	新約研究	上
第九卷	教義研究	下	第十卷	教義研究	上
第十一卷	講演	下	第十二卷	講演	上
第十三卷	感想	下	第十四卷	時評	上
第十五卷	英文(之に準すべきもの)	下	第十六卷	時評	上
第十七卷	日記	上	第十八卷	日記	下
第十九卷	雜篇	上	第二十卷	書翰	下

支拂方法 (内容見本希望の方は東京市神田區一ツ橋、岩波書店に申込まれたし)
 申込 金 貳 圓 (但最終會費に充つ)
 毎月拂一冊分 貳 圓 (申込金共四圓)
 一時拂廿冊分參拾八圓 (申込金不要)
 書留送料 毎月拂地方二十一錢 一時拂地方四圓二十錢
 (臺灣、朝鮮、關東廳、樺太は一冊四十九錢)

發行期日 三月中旬第一回配本、以下毎月一回
 編輯委員 塚本虎二、畔上賢造、齋藤宗次郎、三谷隆正、鈴木俊郎

聖書の眞理誌讀者の大多數は未だ内村先生の著書を読まれない方と思ひます。此の際は非豫約を御勧めします。多分本誌を読まれるより其の方が益があると思ひます。
 聖書の眞理社に申込まる、方には本社は出来るだけの便宜を計ります。

聖書の眞理定價(送料共)

一 部 二十 錢
 半年(六部) 一圓十 錢
 一年(十二部) 二圓十 錢
 海外一年 二圓六十 錢

拂込は聖書の眞理社(振替東京六三三七五番)へ。獨立堂にてもよし。
 昭和六年度合本 二圓五十 錢
 江原萬里著 聖書の現代經濟觀 一圓二十八 錢
 (以上總クロス製送料共)

昭和七年二月廿九日 印刷納本
 昭和七年三月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
 編輯印刷 江原萬里
 兼發行人
 東京市外濠谷町向山九七
 發行所 聖書の眞理社
 東京市神田區表猿樂町一九
 印刷所 共榮堂印刷所
 東京市外濠橋町柏木九四六
 發賣所 獨立堂書房
 振替東京二九四六番

(昭和三年二月十六日)
 (第三種郵便物認可)

聖書の眞理 第五十三號

昭和七年三月一日發行
 (毎月一日一回發行)

本誌定價二十錢